

第29回 IC 国際会議レポート

「人生の夢と希望の実現に向けて」

— 世代を越え、民族を越えた絆 —



人生の目的を見出し、身の回りの問題から世界の問題にいたるまで、それらの解決に取り組んでいる様々な方たちが集い、第29回 IC 国際会議が6月2日(金)から4日(日)まで、三浦海岸のマホロバ・マインズ・ホテルで開催されました。率直にお互いの人生を分かち合い、参加者はそれぞれ大きな勇気を得ることができました。

1. 心の声を聴く、2. 人生の夢と希望の実現に向けて、3. 世界とつながっている私、という3つのテーマで、体験の交換や熱心なディスカッションが行われました。2歳から88歳という幅広い参加者の年齢層、12ヶ国/地域から80名余りの方々が集まり、夫々の夢は多種多彩、どんな風にまとまっていくのだろうという不安をよそに、見事な心の絆が築かれていきました。

7ヶ国からのアクション・フォーライフ(AfL)のメンバー7名を迎えましたが、大切な時間と心を、私達にプレゼントしてくれた彼らに、感謝の気持ちを捧げたいと思います。一人ひとりが心と心を結び合い、人類の夢と希望へ向かって手を取り合い進むための心の準備が出来る会議となりました。

■主な内容■

◆IC国際会議レポート・1-12

◆「静かな時間」・13

◆アクション・フォーライフ3の活動・14-15

◆ICニュース・16

“アクション・フォー・ライフ(AFL)”プログラムでは、世界各国(今回は26ヶ国、46名が参加)から集まった青年達が寝食を共にしながら、インドでの半年間の研修を皮切りにアジアやアフリカ各国をフィールドワークのため3ヶ月間回ります。それぞれの国の文化に触れ、様々な人々と触れ合う旅、そして同時に、「心の声」を聞くという内面の旅を通じて自らの成長を図ります。今回はアジア各地そして、アフリカに向け5つのグループに分かれたうちの一つのグループ7名が訪日しましたが、この引率者である、スレッシュ&リーナ・カトリ夫妻が基調講演を行いました。また、この会議の中でグループのメンバーそれぞれが、自らの旅での経験、また内面の旅について語ってくれましたのでご紹介致します。

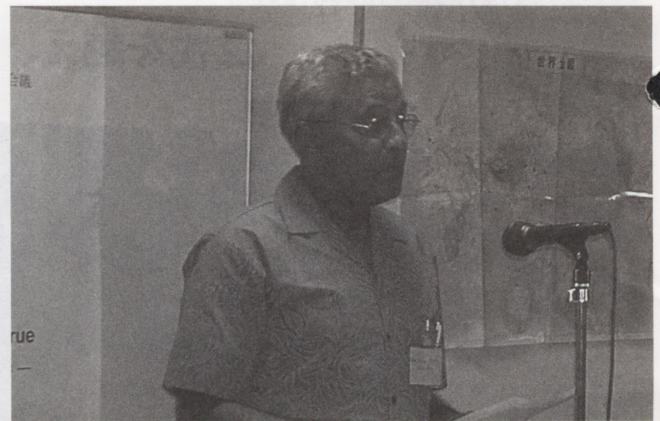
基調講演「世界に希望をもたらすために」

“ハッピーマン(HappyMan)を目指して”

スレッシュ・カトリ(フィジー、IC専従)

さて、この2か月間、「アクション・フォー・ライフ(Action for Life)」の中で、アジアにおける三大経済大国を訪問する機会をいただきました。それは、台湾、韓国、そして現在最強の経済力を誇る日本です。私から見ると、どう見ても、この3か国が現代の不思議を体現しているように思えるのです。社会であれば必ず抱く夢、貧困からの解放という夢を短い間に達成したのですから。史上最速だと思いますし、世界的に見ても他に例を見ないのではないかと思います。この3か国は、他の途上国にとっては学ぶところの多い、また勇気づけられる素晴らしい事例です。西欧諸国以外の国の者にとっては、自分の手柄のようにも感じられ、「日本よ、よくぞやってくれた」と誇りに思います。日本が頑張ってくれたお陰で、私たちもまた「功績という名の電車」に同乗させてもらっているのです。しかし、当然のことながら、「日本は、次にどのような夢を追求していくのか? 今度はどのような形で世界に貢献していくのか?」という質問が浮かび上がってきます。それは、やはり驚異的な技術力を生かせる分野になるのか。それとも他の分野で貢献していくことになるのか……。

韓国のある会社に勤める、頭の切れる若手ファイナンシャルプランナーが2週間前にこんなことを言っていました。「今稼いでおけば、老後にあくせくしなくて済みますからね」。またある理想的に見える韓国人夫婦—ハンサムな若いデザイナーと美しい女性のカップル—は、1月に結婚したのに、新婚旅行に行く時間がまだ取れていないというのです! この二人の仲はかなりぎくしゃくしたものとなっており、奇跡でも起こらない限り、夫婦としてやっていけないほどにまでなっていました。おそらく、このような仕事によるプレッシャーや燃え尽き症候群に似たケースが日本でも起こっているのではないかと思います。



このような中で、一体日本は何ができるのでしょうか? かつてウォークマンやディスクマンを世界に送り出してきた国は、今、ウォークマンならぬハッピーマン、幸せな人間を生み出すことができるのでしょうか?

幸せな人間とはストレスから解放された人間のことです。そして、子供や家族と過ごす十分な時間をもち、内なる充実感を味わいながら、より大きな社会のために自分の果たすべき役割を果たせる人間のことです。幸せな人間、それは、やって楽しいと思えることにより多くの時間を割くことができ、内なる満足感を噛みしめながら生きることのできるような、新しい文化の中で生きている人なのです。この夢を築いていくためには、社会に関わり、新たな責任を担わなければなりません。我々全員で一丸となって、まともな家が皆の手に入るようにしなければなりません。誰もが、無料または少なくとも手ごろな授業料で大学教育を受けられるようにし、十分に食べ、そして何にもまして、他の人のために奉仕できるチャンスを得られるようにしなければならないのです。どうやったら幸せな人間が生まれるのでしょうか。この幸せな人間というのは、聴くことのできる人間—自分の内面に耳を傾け、そのため

の時間をとり、内なる声と直感に従って生きている人間—ということが重要なのです。もう一つ重要なのは、「自由な人間」という点です。自由へ向けた4つの道のり—正直、純潔、無私そして愛—へと道を定めることにより「自由」になれる人間です。

個人的に言えば、私は騙し取ったお金は全て返金し、盗んだ物は全て返しました。かつていがみ合った人たちに対して謝罪もしましたが、この「自由な人間」になる、という転機が訪

れるまで、例えば、過去のいざこざの中には私から仕掛けたものがあつたことを認めたり、ポルノ雑誌を処分して身をきれいにしたり、その他さらに修正していくことが沢山ありました

今回の会議に出席している方々すべてが、どのようにしたら幸せな人間のお手本になれるか、お分かりだと思います。日本は、世界の夢に最も重要な貢献ができるでしょう、また真の平和を築き幸せな生活を皆にもたらすことができるでしょう！

“インド人格銀行とは”

インド国民が称賛してやまない国、日本に来ることができるのは本当に恵まれたことだと思います。

自分の学生時代を振り返りますと、若い頃の私の夢は主に自分自身に関するものでした。つまり、自分がどんな人間になるか、ということ。夢の中心は常に自分だったのです。人生の試練とは、夢を拡大しより多くの人間を包含するようなものにしていくことです。我々一人ひとりか真の成長を遂げるということは、夢の対象を拡大し、夢の中心を“自分”から“他の人”へと置き換えることなのです。この世界に対する私の希望の源は、自分たち自身を超え、他の人たちに対し、社会に対し、そしてより良い世界に対する夢やビジョンを持った人たちに出会ったり話を聞いたりすることにあります。他の人たちと共に一丸となって、そのビジョン実現に向けて取り組んでいくことです。これは、自分たちの人生を変えてしまうような意思決定を意味します。さらには、自分が居心地のいいところから離れるという決意、自分たちの態度を変えるという決意、関係を修復する決意、他人を傷つけたことに対し謝罪をする決意、不正直であったことを認めるという決意・様々な決意を意味します。

1ヶ月前、インドで「インド人格銀行(Character Bank of India)」の口座を一杯にしましょうと呼びかけている、「インド—アイ・ケア—(India I Care)」という運動を開始した人たちと会いました。この運動が今日のインドにとってどうして重要なのでしょうか？自由解放とグローバル化は、インドの一部の階層、特に教育レベルが高く、専門職につく都会的な若い世代に対しては繁栄をもたらしました。しかし、この繁栄を、特に地方に住む大多数を占める人たち、社会の片隅に追いや

リーナ・カトリ(インド、IC専従)



られている人たちをも含む、インド全体に恩恵をもたらすようなものとするためには、自分たちを超えたレベルの夢とビジョンをもつ人たちが必要なのです。手っ取り早く富や地位を手に入れるために、道徳にもとるような行為をしたり、より大きな良きことを犠牲にしたりしないような人たちが必要なのです。ここに、“道徳的な決断をすることにより「インド人格銀行(Character Bank of India)」の口座を一杯にしましょう”と呼びかけている「インド—アイ・ケア—」運動の意義があるのです。

例えば、ボンベイにある大きなマンションを売却し、その際、闇のお金、つまり現金での支払いをよとせず、(身元の判明してしまう)小切手払いを頑として譲らなかつたある女性がいました。小切手払いによって、自分の取り分が少なくなってしまうにも関わらず、です。ノキア社の携帯電話を販売していた若手ビジネスマンは、政府担当者を買収して売上上昇に役立つ情報を入手するのはもう止めよう、と決心しました。また、もうかつていたにもかかわらず、このような会議の

場で、アルコールの製造販売はもうやめるという決意を発表した人もいました。自分の仲間である村人たちの毒となるような事業はもう止める、と表明したのです。そして、その話を聞いたある人から、工場で働く職を紹介されました。

これらは個人レベルの話ですが、ひとつになれば、社会に対する大きな希望のうねりとなるのです。実は私の娘は、インドのプネというところにある、大手ソフトウェア会社に勤めており、この会議にも昨年参加させていただいておりますが、この「インドーアイ・ケア」運動の取りまとめ役をしているのです。会社の仕事は1日12時間にもなるのですが、空いた時間を見つけてはこの運動に携わっており、非常にうれしく思っています。

約30年前、日本のMRA(現IC)の女性リーダーである相馬雪香さんが、カンボジア難民のために日本人一人ひとりに対し、1円の寄付を募った、というお話を伺いました。この相馬さんの夢は、日本から遠く離れたところで助けを求めている国を包含し、さらには世界中の人を奮い立たせることとなったのです。

互いに結びついたこの世界でこそ、大いなる夢が必要であり、それを支えているのは、その夢を絶対になかえ、という決意なのです。勇気を持ってこれらの夢を実現すること、そしてそれに一緒に取り組んでいく仲間作りをすることを通じて、私たちは他の人を触発し、人類に対する希望を与えることができるのです。

“愛に近づいていく”

アレックス・バーンバーク(オーストラリア、AFL研修生)

人間は幸福、平和を求めて生涯を過ごす
くだらない夢を追い、何かにおぼれ、
宗教にすがり、他人にすがる
そうやって虚無感を埋めようとする
実際は自分の中、自分の心こそ探すべき所なのに
皮肉なことである

— ラモーナ・アンダーソン

私もこの一節と同じように、有意義な人生を送り、幸せになり、成功を収めたいと考えていましたが、大学を卒業してから、そのためにはどうしていいのかわからなくなってしまいました。地域社会に貢献するにはパブリック・サービスに就くのがよいだろうと考えましたが、官僚主義に理想を砕かれるまでそう長くはかかりませんでした。そこから私は不幸のスパイラルに陥っていきました。そして自分がしていることに意義を見いだせなくなっていきました。不幸の中、自分が利己的になっていることに気づきませんでした。あらゆる手段を尽くして幸福を求めようとしてきました。アルコール、パーティー、女の子。仕事は死ぬほど退屈でしたが、現実逃避の手段となりました。人生の目的は快適を求めることになり、それを正当化するのはたやすいことでした。それでも自分が醜い人生を送っているとは思いませんでした。親友もいて、ボランティア活動もし、立派な職に就き、あっという間に3回も昇進し、婚約して家を購入し新婚生活を始めたからでしょう。



このように目に見える成功を手に入れていたのに、ますます不幸になっていったのは何故でしょうか。心の声を聞かなければ、この問題は決して解決しなかったでしょう。心の声を聞くということはAFLで学んだ大変すばらしいツール(手段)です。毎日、静かな時間、つまり自分を振り返る時間を持ちます。心の声を聞いたから、何を間違えてしまったのかを明らかにすることができました。このように私は真実を探ってきました。

しかし真実とは、すぐに快適さをもたらしてくれるようなものではありません。私の旅も非常に苦しいものでした。これまでの行動を振り返り、暗い部分に光を当て始めたのですから。人を利用し、嘘をつき、欺いてきた過去を振り返るのは決して気持ちの良いことではありません。利己的、傲慢であったこと

を認めるのも容易ではありません。例えば、作業をしてもらった代金を作業員に直接現金で支払って、税金を払わないで済むようにしたこともあります。国に戻ったらこの過ちを正そうと思います。

このような過程を経たからこそ、たまたま手に入れた幸せをまた手に入れてやろうと必死になる人生ではなく、自分の

中から喜びを生み出す人生へと変わったのです。人生には選択がつきまといまいます。しかし、いずれの選択肢も最終的には2つにしぼられていきます。本当に求めているもの、つまり愛に近づいていくのか、それともそこから遠ざかっていくのか。

私は愛に近づいていく方を選びます。

“私の夢”

私の夢は、愛と正直、そして信頼に裏打ちされた素晴らしい家庭を持つことです。ところが、私には長年にわたり祖母との確執がありました。幼い頃、祖母からひどい扱いを受けていると感じ、ずっと祖母に対して憎しみと怒りを抱いていたのです。本当に考えがたいことなのですが、自分の中に怒りと憎しみが徐々に巣くっていたのです。この気持ちをそのまま露わにすることはありませんでしたが、仕返しにもまた、祖母に対してひどい仕打ちをするようになっていきました。敬意も払わず、口をきくことすらなくなりました。顔を合わせればいつも、尊大でびりびりした態度を取るようになりました。何かしら、祖母を許せるようなことがあれば、と望んでいたのですが、自分の心の奥底を見つめるたびに、憎しみと怒りばかりが込み上げてくるような状態でした。

静かな時間を通じて、このような感情を整理しようと模索し、開放されますようにと祈る中で、私が唯一できることは、自分が抱いているこの感情を祖母に打ち明ける以外にない、と考えるようになりました。

そこで、クリスマスに祖母に電話をかけ、全てを打ち明けよう、と決心したのです。ところが、実際に電話をかけ祖母の声が聞こえた途端に、私は受話器を置いてしまいました……。

私にはもう少し静かな時間が必要だったのです。そして、とうとう内なる声に耳を傾ける心構えが本当にできたのです。神に心の中で懸命に語りかけ、“もう一方の側”を見ることができたのです！とうとう自分が祖母に対していかに苦しみをもたらしてきたか、気づくことができたのです。いかに私はずっと刺々しい態度をとってきたか、その間、あからさまな悪感情を抱き、その結果、問題や怒りを招いてしまっていたことか……。それなのに、私は自分自身に言い訳をし、自分を

ニコル・ミンバエヴァ(ロシア、Afl研修生)



変えることを拒んでいたのです。私は祖母にもう一度、電話をかけ、こう言いました。「ごめんね！おばあちゃんには、随分つらくあたったし、不公平な見方をしたり、不正直だったりしたわ。本当にごめんなさい……。」と。祖母のすすり泣きが聞こえてきます。この電話が効かってくることをずっと待ち望んでいたかのように……。そのとき初めて、「ああ、私にはおばあちゃんがいるんだ！」と人生で初めて実感できたのです！

固い絆で結ばれた家族という私の夢が実現するかどうか分かりません。まだまだ修復しなければならない関係が随分ありますし、これから先の道のりも長いからです。しかし、私には素晴らしい友がいます。私か歩いていくこの旅路を助けようとする意思も能力もある友人です。毎日、静かな時間を持ち、自分の内なる声に耳を傾ければ、自分自身の真実が分かるでしょうし、愛を見つけ、勇気を持って次の一步を踏み出す上でも役に立つはずですよ！残るは、私自身、その心構えができていくかどうかにかかっているのです！

“民族の対話”

ウーラ・エルスツレイテ(ラトビア、AFL研修生)

「アクション・フォー・ライフ(AfL)」は素晴らしい旅ですが、簡単なことばかりではありません。文化や世代や信仰が異なる人々が共に暮らし、様々な経験をし旅をするためには、状況に順応したり、理解したり、問いかけたりする必要があります。これは私にとって大きな挑戦とも素晴らしい経験ともなりました。

AfLによって、今まで想像しなかったほど、過去についてよく考えるようになりました。私の出身地は、15年前はソ連の一部でした。ソ連の崩壊は、人々の生活にたくさんの混乱をもたらし、ラトビアの2つのコミュニティ、つまりラトビア人とロシア人との間にたくさんの苦い感情をもたらしました。突然、すべてが変わり、多くの小さないざこざが大きな問題となりました。ラトビア人とロシア人の子供達は互いを憎むようになりました。憎しみは私の心の中にも生まれました。長い間、私は心の中に、怒り、悲しみ、苦い感情を抱いていました。しかし、大学に入り、ロシア人のルームメイトと毎日暮らし、変わりました。彼女らとの生活で、私は自分の彼女らに対する態度を、彼女らの立場から見るようになったのです。これは大きな教訓となりました。その後、多くのロシア人の友人を得ました。ステレオタイプや苦い感情を乗り越える機会を持ったことをうれしく思います。そのような機会がなければ、今こうしてロシア人の友人ニコルと仲良く話している姿を、皆さんにご覧いただけなかったでしょう。

AfLにはもう1人ラトビアからの参加者がいます。アンナという女の子です。彼女はロシア人のルーツを持っています。AfLでは自分の人生について話す活動があります。そこで、私は彼女の人生、そして、ソ連崩壊後のラトビアでロシア人として暮らす気持ちについて聞く、素晴らしい機会を得ました。彼女と知り合ったのはつい最近ですが、その時初めて、私のロシア人に対する態度に個人的な責任を感じました。彼女の痛みは、私が当時彼女のような子供達に与えた痛みであり、彼女が当時ラトビア人に対して持っていた気持ちは、私が子供の頃経験したものでした。私にとってもアンナにとっても貴重な時間となりました。今、私達の関係は特別なものです。AfLが終わったら、ロシア人とラトビア人との間の対話の機会を作りたいと強く思っています。



AfLでの経験は、率直な気持ちを分かち合うことと静けさを通して得たものです。人生や感情について話し合うことで、他の人たちや私自身をより理解できるようになりました。もしアンナが彼女の話をしてくれなかったら、たぶんロシア人の感情を理解できなかったでしょう。もし静かな時間を持たなかったら、今でも強い信仰を持つ人々とうまくコミュニケーションできないでしょう。静かな時間の本質が本当にわかりました。それは森の中で、道に迷った時に、出口を探すようなものです。ただむやみに走ることはできません。少し止まって正しい方向を得るために、地図を確かめなければなりません。人生で、私は方向を確かめることなく、走ってばかりいました。今、AfLで、朝の静かな時間を楽しんでいます。おかげで道に迷わずにすんでいます。



●食事風景' 左手前がウーラさん

“心の準備”

レイ・アルーリン(台湾、AFL研修生)

AFLの研修中に私は次の四つのことを考えてみました。第一に、研修が始まって間もない頃英語が流暢に話せなくて日々苦勞していた頃のことです。もう一人の台湾人の友人は流暢に英語で話していました。次第に私は自分とその人を比較するようになり、やがて嫉妬心が燃え始めました。しかし、彼女と話をするときはそのような素振りには全く出さず彼女のことを褒めていました。つまり私は仮面をかぶって彼女に接していたのです。当然楽しいはずがありません。しかしあるとき静かな時間の中で「君には君だけが持つユニークさがある」という声が聞こえてきました。その声はあまりに強く衝撃的だったので私は無視することが出来ませんでした。その時以来、ありのままの自分を受け入れ自分を好きになることが出来ました。台湾の友人に対して自分が嫉妬心を持っていたことを話し謝りました。それ以降、嫉妬心から開放され、真の自分と向き合い、その台湾の友人とも真の友情を築くことが出来ました。

第二に、「お前を愛したことなどない」と言っただけで12歳の時私を捨てた父をずっと憎んでいたことです。その憎しみは私の人生に大きく影響し、私は誰も深く真剣に愛せなくなっていました。しかし、その父に手紙を書こうと決心しました。投函すべき住所も分からなかったのに兎に角書きました。自分の赤裸々な気持ちや父への疑問をぶちまけた長い長い手紙を書いているうちに次第にこの父を許し、もう一度好きになれると分かったのです。深い愛が引き起こすことのある苦しみというものをおそれることなく人々を愛すということを今、学んでいます。

第三は、いつも他人から褒められたり同意されたりすることに依存し、それで安心感を感じていたことです。しかし、静か



な時間を通して、人のほめ言葉ではなく自分自身の心の中に安心感を求めるようにしました。つまり自分を信じ愛することで、安心感が持てるようになった訳です。

第四に、インドを旅行中、恵まれぬ人や苦しみを背負った人を助けたい、と常々口では言っていました。実際の場に行き想像以上の貧困や病気の苦痛の状態を目の当たりにしたとき、それを直視し対応できるだけの強さが私にはなかったということです。私はただ泣くばかりで、自分が何をしたら良いのか考える余裕すらありませんでした。自分のこの部分に気付いたとき、そしていろいろな人に出会ったとき私は強くなる事が出来、どんな問題にも面と向かう心の準備が出来ようになりました。

このように私にとってすべての物事を正していくには、まだまだ長い時間がかかるでしょうが、いつか私の生き方そのものが周りの人々や世界中の人々へのメッセージとなる日が来るまで頑張り続けたいと思います。

“和解”

クリストファー・ブレイテンバーグ(アメリカ、AFL研修生)

アメリカから逃げ出すためにAFLに入ったようなものでした。大学生生活を終えて、2年間というものアメリカの世界に対する態度や外交に不満が募り、それはブッシュ大統領への憎しみに繋がっていきました。ブッシュを好きになるように何とかしなければならぬと思いました。AFLの前は、ブッシュ

大統領の話がテレビで始まると、批判して叫んでばかりいましたから少し旅をしたくなりました。インターネットでAFLの案内を読んだ時、マハトマ・ガンジーの『望むような世界の実現のためには、先ずあなた自身が変わりなさい』というメッセージが心に響きました。このメッセージに向き合い、自分の行

動・態度を考え直さなければならぬと思いました。このメッセージを考えた時、自分自身が変らぬといけぬと思ひ、「静かな時間」を持った時、自分の夢が見えてきました。私の夢とは、世界の人々が愛し合い、心豊かな世界を作ることでした。この夢を実現するためには、先ずジョージ・ブッシュを好きになる方法を見つけなければと思ひました。自分が一日だけアメリカの大統領になったと想像してみた時、そのような大きな責任を取ることの大変さを容易に感じることができました。

しかし、心の中で新しい愛情が生じたとしても、彼の殆どの政策に同意出来なかつたので、実際に協力するという次のステップはより難しいと思ひました。「静かな時間」を持つて分かつたことは、1人の人間を憎むことに精力を費やす代わりに、世界を自分の中に受け入れるために自分を捧げることができるとのことでした。先ず、人の話を聞き、世界と対話し学ぶ一人のアメリカ大使としてAFLに加わろうと決心しました。

7ヶ月前、AFLのグループに参加するためにインドに向かい、心の準備もしていた積もりでしたが、AFLの様々な体験に戸惑うことも多かつたのです。アメリカ人であることで、自分に過度な敬意が払われる時もあれば、人々の言葉や反応に心の痛みを感じたり怒りを覚えることもありました。

特にインドでのある夜、AFLに参加していた若いベトナム人が、「自分はアメリカの国やアメリカ人を憎んでいた」と告白しました。彼のその言葉に、私は非常に驚き、ショックを受けて体中の血が逆流しました。それは強烈な個人攻撃に聞こえたのです。正に爆発しそうになる寸前に、自分の誓いを思い出し、彼の話しを聞き、自分の心の声を聞こうと決心しました。そして、内なる声を聞いているうちに、彼の憎しみは、心の痛みから発し、彼の魂が癒されていないことに気づきました。



その夜は誰とも話をする事なく部屋に戻りました。「静かな時間」を持って、世界に対する私の夢について考えました。彼とずっと話をする事が先ず次のステップであると感じました。

戦争とそれが彼の家族に与えた苦痛について詳しく聞くことが出来ました。また、40年経つた今、同じ間違いをイラクで自国が犯したことに對する自分の苦しみについても彼に話しました。

共通の未来を築くため、私達は過去の歴史を語り合ふねばなりません。先ず事実を正確に知つた上で、お互いの感情についても話し合ふなければならなかつたのです。感情も又、現実の重要な一部分だからです。彼と引続き何回か話し合う中で理解が深まり、友情を感じ始めました。

この心の葛藤は苦しかったですが、私のメッセージを体現していく勇気づけとなりました。「静かな時間」を通して、自分の夢を見出しましたが、それを実際に生きる必要があつたのです。

痛みをもたらす彼の言葉が、私のビジョンの実現に向けての次のステップを見出す機会を与え、夢を実現できるよう勇気付けてくれたのです。



●どのセッションでもAFLの素晴らしい歌を聞くことができた



●ニュージーランドの先住民マオリ族の歌と踊り

会議の3日目には、「世界とつながっている自分」のテーマの下でセッションがもたれましたが、その中でのお話をご紹介します。

“千里の道も一歩から”

シュー・ショウファン(台湾、通訳者)

9年前の1997年、国際IC日本協会主催のアジア太平洋青年会議(APYC)に参加しました。当時、私はまだキャリアとして歩むべき道を必死で探しているところでした。96年にスイス、コーでのIC世界大会に出席し、台湾代表団のアマチュアボランティア通訳者として働いた後、通訳者になろうと考えるようになりました。「静かな時間」で、この自分の考えに対する確認とはっきりしたガイダンスを求めた時、残念なことに100%確かな答えを得ることはできませんでした。そして97年、来日のおよそ2ヶ月前、台湾の通訳修士課程の入学試験に失敗して、通訳者になろうという強い思いは弱まってしまいました。

97年のAPYCで、私はふと気が付くと台湾人の友人達のために再び通訳をしていました。そして、文化間のコミュニケーションの架け橋となることの喜びと満足感が心を強く動かし、改めて通訳者になろうと強く考えるようになりました。またそれまで失敗への恐れから、入学試験に十分に備えることを無意識のうちに避けてきたのだと気がきました。当時、考えるようになったのは、信頼することを学び、恐れを捨て、天からの100%確かなサインを待つのではなく、心から自分の道を受け止めるべきだということです。道の終わりに何かがあるか、はっきり見えるまで待つのではなく、目の前の一歩が見える間は、一歩ずつ前に進むべきなのです。

今回は、フリーの通訳者として、東アジアNGOフォーラムの台湾のリーダーのグループに同行して9年ぶりに来日しました。このフォーラムの主旨は、東アジアの国々、具体的には台湾、日本、韓国、中国のNGO間の国際的なネットワークと協力のための基盤作りです。このフォーラムのテーマは、今年の3月にマレーシアで開催されたICグローバル会議で、東アジアのICのために唱えられたビジョン2020と似ています。つまり、2020年までにこの東アジア地域でどのような変化が起きて欲しいかを考えたもので、次のようなことが含まれています。

- ・北朝鮮と韓国の和解、さらには統一。
- ・中国が中国文化に本来あるすばらしいモラルと精神的価値観を大切にすること。モラルと価値観が、この



地域の社会と文化の共通の基となること。

- ・日本とこの地域の国々との関係を改善すること。歴史と正しく向き合うことで、傷を癒すことができる。

このようなビジョンの実現のために私達一人ひとりがどのような役割を演ずることができるか、皆様にも考えていただきたいと思います。中国の古いことわざに「千里の道も一歩から」というものがあります。心の中の小さな声に耳を傾け、従えば、夢とビジョンに向かう正しい一歩が見えてくると信じています。

あるベストセラーの本に書かれていますが、通信技術の進歩もあって、世界はつながっています。しかしまだあらゆるギャップや壁がたくさんあり、私達が人間として互いに手を差し伸べる妨げとなっています。最も深刻なのは、まるで温泉の流れを岩が止めるように、欲、憎しみ、無知が私達が自由に心を分かち合うのを妨げていることです。

私の中国人へのビジョンは、私達の文化と伝統の最も良い部分を分かち合うということで、21世紀の人類のため、モラルと精神的価値観の回復に向けて、何か貢献できる日が来ることを望んでいます。そのためには、日常生活の中で、モラルと精神的価値観を実現することを、個人的なレベルから始めなければなりません。私はこれからも通訳のスキルを使って、中国と世界とのコミュニケーションの架け橋となっていきたいと思っています。世界には、より多くの架け橋とそれを作る人が必要です。この部屋にいるすべての人が架け橋になれると信じています。

“親友”

イ・ミンジェ(韓国、大学生)

今、日本で貿易の勉強をしています。日本へ来たなら日本語を勉強したり、友達を沢山作りたいと思っていたのですが、日本に来て見ると学校には韓国、中国、タイ、ヴェトナム、バングラディッシュの人達が沢山いました。すぐに彼らと友人になりました。タイの友人とタイ料理パーティーをしました。そこで私のことをペチュラー(ダイヤモンド)と呼んでくれました。また学校では台湾の方が多く、その方たちと話したいと思いました。高校の時覚えた中国語を思い出して、中国語で「私は可愛い女の子などと言うと、大笑いになり親しくなりました。今、中国語も勉強しています。その方たちと親しくなり、台湾の方とルームメートになっています。私は台湾の料理が食べられないのに、ルームメートは韓国料理が大好きで、色々作ると喜んで食べてくれます。また台湾の歴史や現在の状況など、沢山教えてもらいました。昨日の夜、三浦海岸では、台湾の人や他のAFLの人達と一緒に海辺で色々な国のゲームをして遊びました。とても楽し



いひと時でした。日本に来てこれほど様々な国の人と交われるとは、思いませんでした。彼らと交流して色々なことを学ぶことが出来ました。このような機会を与えられそれぞれの文化を知って、お互いに理解できることを本当に嬉しく思います。この経験を将来のために、活かしていきたいと思います。

“地球は悲しんでいる”

吉川英治(元プロボクサー、専門学校講師、各種ボランティア活動に従事)

世界を変えなくてはならない。地球は悲しんでいる、地球は癌にかかっているようなものです。癌細胞がいつばいあって、広がってしまっている人間の身体と同じです。癌は一つ悪くなると次々と広がっていく。挨拶が出来ない、人に優しくないと、そういうことは、地球の癌の始まりなのです。自分自身を良く治めないと、世界は寒々しいところになってしまいます。

海に色々な生き物が仲良く暮らしている、これは人間の世界と同じです。大きい人、小さい人、強い人、弱い人。日本人はどんな形かという、スタイルは、魚のリーダーが「こちら」と言うと、全員がそっちを向く魚と同じ、これが日本人の性格の良くないところ。自分で考えないで他の人に直ぐついて行ってしまふ。人間は底なしで、天井のない無限の力を持っている。私のようなボクサーは、10Kg減量すると、ドライフラワーのようになる。1回座ると立てなかつたり、階段を上かぬなくなるのに、リングに上がると、負けない力が出る。走る時ガソリンがないと、立派な車も1mmも動けないのに、人間である私は、ガスがなくてもハートの力があれば、動くこと、戦うことが出来る。素晴らしい力、ハートの力を持っていることを忘れないこと。



アマゾンの話、森が火事になり動物が逃げていく。小さな小鳥が一羽で、火を消していた。出来ることをやっているが、効果がないように見えた。しかし、彼女の決心が状況を変えた。皆が彼女を助けて、火を防いだ。彼女は鳥の目を持っていて、ただ逃げても生きる道がないことを知っていた。

Ido that, I (私)がいつばい集まると、Weになる、皆一緒。背筋を伸ばし、自分を正す事で、人に広げていく。どこに居ても人とつながっている、そのような人になるべきだと思います。

この会議に参加した感想をアンケートに書いて頂きました。閉会式に話して頂いた何名かの感想や、アンケートの中からそれぞれの方々が感じ学ばれたことや決意などを「私の第一歩」としてご紹介致します。

「私の第一歩」

飯野 宏美(保母)

日常の中で、自分が出来ることを積み重ねていくことが、世界に通じることの第一歩であること。そして色々な国の方々と交流をすることで、多くの知らなかったことを知り、お互いの国の良い所を伝え合うことが出来ました。この会議に参加出来たことで、夢と希望の実現に僅かずつですが、近づけたような気がします。

王 翼翼(中国、留学生)

参加して良かったです。色々な国の友人が出来ました。夜遊んだ時、高校時代の頃を思い出しました。今までは、日本人に受け入れてもらえませんでした。改めて自分の過去を振り返って考えると、自分から逃げていたことが良くないと思いました。正直な人生を送りたいと思いました。

太田 和江(会社役員)

国際会議にふさわしい出会いが準備され、進行され、とても有意義でした。朝の始まりに対する指針を頂きました。

加藤 愛(通訳者)

初めて通訳者として来たのに、一人の参加者として扱って下さってありがとうございました。またこのような機会に参加したいです。

武井 はるな(会社員)

沢山の外国の方々、日本全国からの皆さんと話すことが出来て、自分の人生のプラスになりました。今回のテーマや、自分の人生について、皆と一緒に考えることの素晴らしさを感じました。勇気を出して参加して良かったです。

弓場 睦(ITコンサルタント)

ICの自分と向き合う、自分の内なる声に耳を傾けるといふ手法はとても新鮮で、自分の今後の人生に大きな影響をあたえることと思います。人との出会いを大切に、語り合うことでさらに自分の考えの枠を広げる。シンプルなことですが改めてその大切さを認識出来ました。

森 みゆ妃(会社役員)

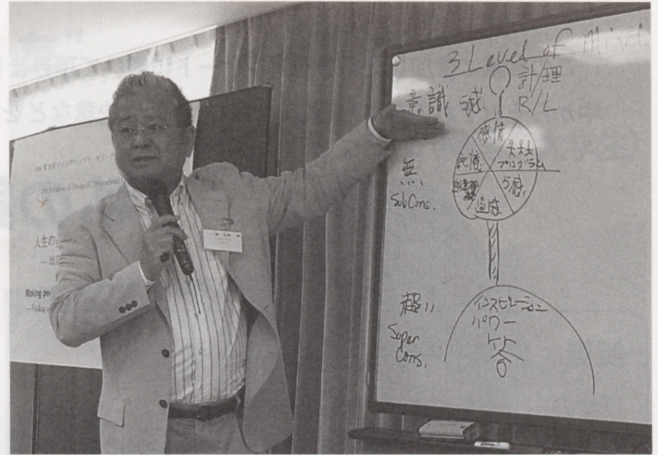
世界平和というのは今の自分にとっては、とても大きすぎる事だと思う。でも、これに参加することによって、私が今まで知らなかった国で、私が知らなかった戦い、偏見、差別などが起きていることを知ることが出来たことで、世界がもっと身近に感じられた。それと同時に、世界で起きていることではなく、ここにいる沢山の人種や思想を越えた一人ひとりの問題なんだと思った。私がこれから出来ることは、先ず自分自身の中で、心の平和を創ること、自分を信じたり、認めたり、誇りを持つこと。そして、先ず私を割り上げられる自分の家族の中に、平和や幸せをもたらす、それが波紋となって大きくなっていくように努めたいと思います。

弓場 恭子(看護師)

さまざまな方達と心からの交流ができたことに感動しました。ワークショップをする中で人にはそれぞれ何らかの心の傷をもっていることに気づかされました。その一方で、相手を通じて自分の心の傷にも目を向けることができました。その部分に、人を思いやる、徳を積んでいくというICの考えを感じ、感動しました。日常から離れて自分をふりかえることができたので、今まで苦しいなあと思っていたことは、夢やゴールを追いかけてビジョンをどこかに忘れてきていたからだだとわかり、救われ、勇気もてました。



●歓迎の挨拶を行う橋本徹国際IC日本協会会長

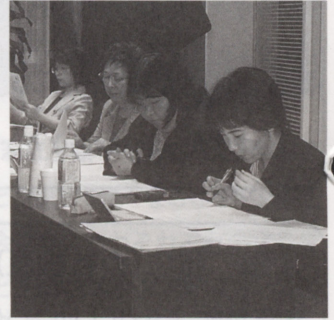


●森 文男氏による「夢の実現のために必要なもの」のテーマのワークショップ



●分科会での話し合い

会議 の 様子



●会議を支えてくれたボランティア通訳陣



●アン・ヒジュン韓国MRA/IC協会理事



●最高齢参加者の袴たか子国際IC日本協会副会長と
最年少のコユキちゃん

国際文化の夕べ



●楽しい歌と踊りを披露してくれたライトハウスの保母さんたち



●共に歌う中国と台湾の参加者



●ウイグルの民族舞踊も披露された

一日のスタートである朝、心を鎮めて自分のこころの中に響いて来る、心の声に耳を傾ける「静かな時間」を持つことが大切です。この会議の中でも「静かな時間」の大切さを学び共に体験したことは、深く心に残ることでした。一人ではなかなか実行出来ず理解出来なかつたことも、共に体験し分かち合うことで、深く心にとらえることが出来ました。この会議の中で、フィージーのスレッシュ・カトリさんが話してくれた「静かな時間」の持ち方についてご紹介します。

“ 静かな時間 ”

6月4日はMRA(現IC)が世界に船出した記念日でもあり、創始者、フランク・ブックマン博士の誕生日でもあります。

フランク・ブックマン博士の人類への最大の貢献とは何でしょうか？

彼の大きな貢献は、毎日充分な静かな時を持ち、浮かぶ考えを書き留めることを通して、誰でも自分自身のための、そして、人生や世界に対するより大きな役割に対しひらめきを求め、見出すことができるという考え方を示したことです。そして、それら得た考えを誰かと分かち合うこと。そして、最も大切なのはそれら得た考えを実行に移すことです。これは、既に一世紀近く試されてきましたが、現在においても有効であり、多くの人生や社会に変革をもたらしているのです。

瞑想とはどのように違うのでしょうか？

心を一つの焦点に集中し、気を散らすものを寄せつけないという瞑想は、その実践者に役立ちますし、ある種の平安をもたらします。ブックマンの内なる声に耳を傾けるというやり方は、「応用された瞑想」と呼べるかもしれません。自分のために何もかも望むことなく、特に自分の気に掛けている人々や社会問題に対し意識を向け新しい考えを求めます。

ブックマンを知る人々は、彼がいつも内なるひらめきに耳を傾けていたようだと言います。もう一つ、ノートとペンを持って座っている姿が連想されます。静かな内省のうちに得られる考えを書いておくということの大切さを、彼は、「最強の記憶よりも、薄いインクで書かれたものの方が勝る」と言っていました。

導きを求めるための唯一の正しい、そして決められた方法というものがある訳ではありませんが、長年の蓄積から得られた有効な提案はあります。その中でも重要なものはその手順

ということです。つまり、Look Up. Look In. Look Out. (心を天に、内に、そして外部に向ける)ということです。

Look Upとは、先ず創造主に感謝するということです。

Look Inとは、自分の内に変革と成長を求めるということです。

Look Outとは、他の人々や問題に対し変革をもたらすための仲介者になる備えをするために日々考えるということです。

目安とされている一時間をとるのが難しければ、毎日一定の時間に20分を静かな時間として割り当て、次のようなことを試みて下さい。

0-2分：祈り。もし創造主やより高い力の存在を特に信じていない方は、昨日起きたこと、あるいは、生活の中で感謝すべき事柄を考えて下さい。

2-4分：集中するために瞑想をする。

4-6分：今日やるべきことをリストアップする、支払いや何を料理するか等。素早くこのことを済ませば心が自由になり、もっと深く心の声を聞くことが可能となります。

6-10分：正直、純潔、無私、愛というサーチライトを当てて、何か自分が変わるべき点がないかチェックする。昨日の間違いに気づけば、速やかに正すよう考える。内なる成長の術を求めます。

10-20分：毎日、少なくとも変革と一層の成長を促したいと思う同一の人物3人のことを考える。「毎日、心の中で目の前を3人の人を通らせよ」

そして、毎日一つ以上の国の問題に対して、自分が何かできるかについて考えてみましょう。

毎日得られるとは限りませんが、時としてひらめきを得ることがあり、それこそが社会の変革に大きく貢献をもたらすのです。

子供たちの心に響いた交流 —アクション・フォー・ライフ3の活動—

アクション・フォー・ライフ(AfL)のグループは、国際会議の後も多くの学校等を訪問するなどしましたが、心と心が響き合う真の国際交流が行われました。



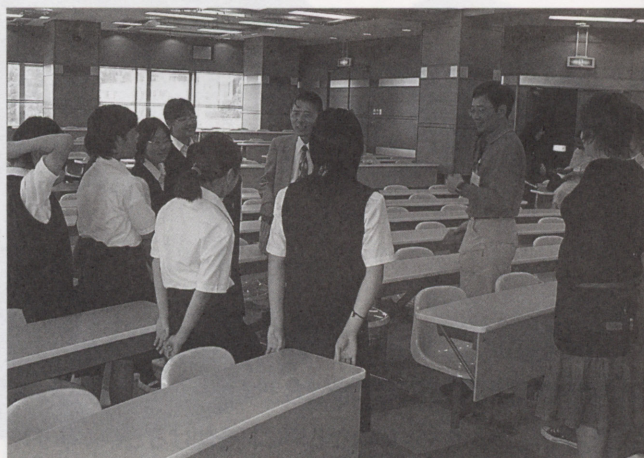
●ICよつ葉会主催の歓迎お茶会で日本文化の一端に触れる



●今回でAfLのグループの訪問が4回目となった箱根小学校での交流



●小田原市立三の丸小学校(初訪問)では、プレゼンテーションの後、一緒に給食をとりながら更に交流を深めた



●AfLのプレゼンテーションの後で相洋中学校(初訪問)の生徒さんたちの感想を聞く



●相洋高等学校の和太鼓部で演奏を習うAfLのメンバーたち



●相洋中・高等学校の柔道部の練習を体験したロシアのニコルさん(後列右から2人目)

アクション・フォー・ライフ(AfL)の青年たちは、箱根小学校を皮切りに、相洋中学校、小田原市立三の丸小学校、芦子小学校、そして、国府津小学校を訪ね、生徒や先生の皆さんと交流を図りました。AfLのメンバーの出身国の挨拶の言葉や文化を紹介したり、歌や寸劇、メンバーの体験談等からなるプレゼンテーションは、1時間近く続きました。「何かを変えるためには先ず自らが変わって行こう」というメッセージを伝えた寸劇の中で、子供たちに協力を仰ぐシーンでは、沢山の子供たちがこぞって前に出てきてくれました。又、寸劇に続いて、AfLのメンバーから、自らが勇気を出して変わったという体験談が話され、その後、皆で一緒に目を閉じて「静かな時間」を持ちました。「浮かんだ考えがあったら話して下さい」という呼び掛けに対し、「もっと、お父さんとお母さんの言うことを素直に聞こうと思う」、「友達にもっと親切にしたいと思った」等、多くの生徒さんたちが手を挙げて心に思ったことを話してくれました。

「低学年の生徒たちも、まったく飽きることなく、集中して聞いていたので感心しました」という先生のコメントも頂きました。又、「今回の訪問は一味も二味も三味も違う国際交流でした」と述べられた校長先生もおられました。



●小田原市立芦子小学校(初訪問)での交流



●小田原市立国府津小学校(初訪問)での交流の様子は神奈川新聞や神静民報、OCTVでも紹介された(写真は平成18年6月8日の神奈川新聞に掲載されたもの)



●小田原でお世話になったホストファミリーのご家族たちへの感謝の夕べがIC小田原サークルの主催で開かれた



●二宮神社を訪問。草山宮司から二宮尊徳の思想と業績を学ぶ。中国から二宮尊徳の研究のために来日している研究者のお二人も合流



●昨年に引き続き国際基督教大学の留学生と交流。この後、鈴木学長ともお会いした



●韓国と日本のICユースのメンバーと楽しくも深い心の交流を図った

◆◆◆ICニュース◆◆◆

■インドでIC青年会議が開催される

6月初めにアジアプラトリーにて、インド中から170名の青年が集まり毎年恒例のIC青年会議が開催されました。開会式でMRA(現IC)のパイオニアであるマトアー氏がインドの問題に対し責任をとって行くよう参加者にチャレンジしました。別の講演者もインド社会に横行している汚職撲滅のための隊列に加わるよう促しました。毎日のプログラムは、「静

かな時間、祈り、そして、体操から始まりました。そして、著名なゲストによる講演や小グループに分かれてのディスカッション等がありましたが、テーマの中には、企業倫理や、公衆衛生、カシミールでの紛争、家族の価値等が含まれました。深い友情が築かれ、将来のアクションに向けての決定がなされました。

■カンボジアの学生たちの連帯

カンボジアのIC学生チームは、ベトナムとの国境の側の貧しい地域の学生達のため、必要な文具を持参する支援活

動を行っています。

(事務局注：昨年来日したAFLの修了生であるキム・グットさんを中心にICの様々な活動が行われています)

■ICアジア・大太平洋青年会議の開催

インドネシア・ジョクジャカルタでの5月の悲劇的な地震に伴い、ICアジア・大太平洋青年会議は、その場所をジョクジャカルタからジャカルタ近郊に移し、期間も短縮し(7月

23日～30日)開催することになりました。アジア各国からの青年の参加が予定されています。

(事務局注：日本からは2名が参加)

■コロンビアでの階層の違いによる分裂に橋を架ける

「コロンビアはどこに向かうのか?」のテーマの下、豊かな北部のボゴタ、そして、南の貧しい人々の住むコミュニティからの参加者たちがICの会議に共に集まりました。

60名の参加者は、様々なテーマの下で小グループに分かれ話し合ったことにより、正直さや階層の違いを超えた分かち合い、そして、お互いへの態度の変化がもたらされました。

(何れもワールド・プレティン7月号の記事から訳出)

入会のご案内

IC (Initiatives of Changeイニシアティブス・オブ・チェンジ、前身はMRA (Moral Re-Armament))は、1938年にロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分、そして、自国から変わるべきである」という理念に基づき、あらゆる民族や宗教や文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な絶対基準(正直、純潔、無私、愛)にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当国際IC日本協会は、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等々内外で様々な事業を行っています。ご入会された方には各種行事案内、又、機関紙等をお送り致します。世界情勢を知り国際的な視野を得ることが出来ます。

年会費	1.正会員 個人	6,000円	2.賛助会員 個人	3,000円以上
	法人	50,000円	法人	50,000円以上

編集後記

今号は去る6月に『人生の夢と希望の実現に向けて』のテーマで開催されたIC国際会議の報告をさせて頂きました。諸事情によりご参加頂けなかった方々にも内容の一端が伝われば幸いです。

尚、本機関紙に関しましてご意見等がございましたら、どうぞIC事務局までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。(K.N.)

編集委員：長野 清志、高橋 久子、中嶋 邦子 翻訳協力：加藤 愛、中島 信子、西部 克子、横山 直美